ハラスメント防止委員会企画シンポジウム

学校現場でのハラスメント ——部活動に焦点を当てて——

Harassment at School: Focusing on Extracurricular Activities in Japan (Bukatsu)

RYO UCHIDA, YASUHIRO OMI, MASAOMI KANEKO AND YUSAKU OTSUKA

話題提供 内田 良（名古屋大学）
話題提供 尾見 康博（山梨大学）
指定討論 金子 雅臣（職場のハラスメント研究所）
司 会 大塚 雄作（京都大学）

（大塚雄作） ハラスメント防止委員会の企画講演会、シンポジウムも、今回で9回目となりますが、今回は、小学校から高校までの学校現場におけるハラスメント、とりわけ、部活動に関わるハラスメントに焦点を当てることにいたしました。これは、たまたま、委員会内で、今回のテーマを決めるための議論をしていた昨秋の時期に、本総会の開催大学である日本大学が関わるアメフト部の問題が話題になっていたということと、正直、無関係ではありません。実は、私自身が、京大のアメフト部の部長を4年間務めていたということもありまして、ある意味で、この問題は他人事でない部分がありました。大学の部活動やオリンピックに関わるこの種の問題は、他にも柔道やレスリングなど、次から次に、噴出してきておりまして、東京オリンピックも1年を切る時期でもあり、今まさにタイムリーということもあって、取り上げてみようということになった次第です。

ただ、大学やオリンピックレベルの言ってみれば「プロの世界」でのハラスメントの問題は、日本教育心理学会のテーマとしてはやや距離がある部分もあります。そこで、同様にいろいろなハラスメントに関わる問題が報道もされております学校現場の部活動に焦点を当ててみようということになりました。その際に、私に代わりましてこれからハラスメント防止委員会の委員長を引き継いで下さる進藤聡彦先生が、偶然にも前の職場の同僚である尾見康博先生がまさに部活の研究をされていると紹介下さいまして、今回のテーマ「学校現場でのハラスメント——部活動に焦点を当てて」が決められた次第です。

部活動のテーマということでは、みなさんもよくご存じの内田良先生にも是非お話を伺えればということになり、学会の日程が既に固まっていた、この時間のピンポイントのご登壇のお願いをしましたところ、快くお引き受け下さいました。ということで、ご多忙のなかお越しいただきました名古屋大学の内田良先生を紹介させていただきます。内田先生は、教育社会学がご専門ということで、教育心理学とは違った領域との交流も、こういうハラスメント防止委員会ならではのいいチャンスになると思います。まず最初の話題提供をいただきますので、よろしくお願いいたします。

続いて、山梨大学の尾見康博先生に話題提供していただきます。私は、昨年度、『教育心理学年報』の編集委員長を仰せつかっておりましたが、尾見先生は副委員長を務めて下さいました。今年も分厚い『年報』がみなさんのお手元に届いているかと思いますが、今年の委員長は尾見先生でありまして、ルーチンに流れやすい編集作業にも、先生は自らの考え方を積極的に盛り込んで、ますます『年報』は充実してきたと思っております。『年報』には、このハラスメント防止委員会企画の講演会・シンポジウムの報告が毎年掲載されており、今日のシンポジウム報告も来年の『年報』にまとめることとなりますので、ご参照いただければと思います。

お二人の話題提供に続きまして、ハラスメント防止委員会の専門委員として、この委員会企画の講演会・シンポジウムでも毎年お世話になっております、「一般社団法人職場のハラスメント研究所」代表の金子雅臣先生に指定討論をお願いしております。

それでは、その流れに従いまして、まず、内田良先生から話題提供をお願いいたします。

(内田 良) 皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました名古屋大学の内田良と申します。本日はこういった研究ならびに啓発活動の成果を発表する機会をいただきまして、事務局の皆様にお礼を申しあげたいと思います。ありがとうございます。

尾見先生のほうから後でご紹介があるかもしれませんが、尾見先生の『日本の部活』という、部活つながりで、数年ぐらい前からいろいろと情報をいただきながら、僕も勉強してきたところです。尾見先生との対談の記録がウェブサイト (<http://chitosepress.com/2019/03/28/3647/>) 上に出ていますので、またご覧いただければ幸いです。今ご覧いただくと、ネタバレするので、後でご覧ください。

さて自己紹介ですが、専門は教育社会学です。ずっと愛知暮らしです。そうすると、皆さんも地方に住んでいらっしゃる方はお感じかもしれませんが、地方にいますと、なかなか研究のネットワークというのが作れなくて、どうしてもローカルに「ぼっち研究者」になりがちです。とりわけ僕は人と付き合うのがそんなに好きじゃないので、本当にぼっちで暮らしてきたというところがございまして。関東は本当にネットワークが広がっていいなというふうに今でもよく思います。

そうすると、ぼっち研究者って、サバイバルストラテジーを考えなきゃいけない。大規模研究というのは、ぼっちでは難しい。やはりマイク1本というか、ICレコーダー、当時はMD、録音付きMDみたいな、そういったものを持ってフィールドに出かける。虐待を受けたり、あるいは虐待をしてしまったという当事者にインタビューに行くという、大学院生の頃は、そういった質的な研究をやってきました。これはネットワークがほとんどいないわけですね、個人で何とか開拓できます。

ただ教育社会学というのは、心理学とまったく同じように、統計ができないと、実は仕事にならんという学問なんです。ならんと言ってしまうんですけども、ある程度統計できたほうが就職しやすいという事情がございまして、もうICレコーダー1つだともうにもならないわけですね。だから量的研究をやらなきゃいけない。でもネットワークがないということで、とりあえず簡単にやるにはどうしたらいいかということで、この二次分析による量的研究、すなわち既存の調査データをもとに仕事をするという、そういったこ

とを考え始めました。

つまり眠っている既存の全国のデータを拾ってきて何かをやると。そうすると、全国のことが一気にわかる。ただ、分析そのものは非常に簡単に済むわけです。なので、とにかく何かマクロデータを見つけて、それを分析すると、ぼっちであってもいろいろ研究業績が作れるぞということで、この十数年はもうずっとそこを中心にやっております。

そのなかで、児童虐待の話ですけれども、こんなことをしました。児童虐待の都道府県と政令都市の発見率、認知率と言ったほうがいいかもしれないですけども、虐待の統計が取られ始めたのは1990年からなんですね。当時は、発見率というのは、あんまり都市と地方の間で差がないんです。

ところが虐待問題のピークというか、1つの大きなピークというのが2000年なんですね。児童虐待防止法という、初めて本格的な法律が作られるということで、その2000年に向けてものすごい勢いでこの虐待問題というのが盛り上がっていった。その基盤には心理学の皆さんもいらっしゃった。

その過程で、だんだんと都市が虐待の発見件数、認知件数が高くなっている。つまり虐待問題というのは都市的に語られていくみたいで、そうすると、当然ながら、何か密室の中で母親が子どもと24時間一緒にいてとかっていう、そういった物語が量産されていくわけです。

だからその一方で、都市型のモデルからは漏れるような状況のなかで、むしろ文化のようなかたちで雑な子育てをしている、当たり前のように子どもを叩いたり放置したりしているといったことを見落とすんじゃないのか、と。そういった問題提起をいたしました。

さて、虐待って、大体新しい時代の問題として取り上げられることが多い。今日いままらお話する学校におけるハラスメントというのは、どちらかと言うと古い時代、つまり「まだやってるの?」と語られることが多いように思います。

各学校では、子どもがけがした時に、医療費が保険のかたちで日本スポーツ振興センターから支払われます。その報告書がこうやって毎年出ています。これ開いてみると、こんなふうに子どもの死亡事故が載ってるんです。ただしそれで終わり。死にましたという事例が、漠然とした事例が出て終わり。本出して終わりというのが、これまた何十年も続いてきたんですよ。

なので、これは10年ぐらい前のことですけどね、この事例1件1件カードに貼って、分類していくという

ものすごい細かい作業をアルバイトの学生を5人雇って、2カ月かけてやりました。この時ばかりはさすがにコスト、お金の意味でのコストはかかりましたけれども。

それでこんなふうにカードの束を作っていたわけですね。これで二十数年分の死亡事故を分類していったということになります。そこでいろんな事故が見えてきました。その1つが例えば柔道の事故でした。中学1年生や高校1年生が柔道部の練習中に、大外刈りで頭を打って亡くなるという事例が出てくるんですよね。

柔道で子どもが死ぬんだってつぶやくと、ほかのアルバイトの学生が、先生、ここにも同じのがありますよって、高1が大外刈りで頭を打って死んでますよって。えって、次々と出てくるんですよね。でも誰もそんなこと知らないわけですよ。

しかも今、大学って、新聞記事のデータベースがあるじゃないですか。スポーツ振興センターの報告書には、何月に亡くなったかも書いてないですよ。だから何月に亡くなったかを新聞記事と頑張って照合すると、いくつか照合できるんですね。ほとんどの死亡事故が5月から8月ということもわかったんです。

つまり、もう答えは簡単で、中1か高1が受け身の練習ができないまま、本格的な練習に取り組む。尾見先生のところでお話があるかもしれませんが、勝つために試合に出る、何も受け身を取れないまま、先輩の相手をさせられる。そういう中で頭を打って死んでいる。これは事例が5件あれば、簡単に予見可能性立つんですけども、1件1件、「スポーツにけがはつきもの」という、これは字義どおりに殺し文句ですよ。それをずっと繰り返して、続いてきたわけですよ。

さらに部活動って部員数がわかるんですよ、中体連、高体連が調査しますんで。部員数がわかると、今度は死亡事故の発見率が出せるんですよね。それで競技別で死亡事故を出すと、もう柔道というのが突出して高いと。左が中学校で、右側が高校ですけども、高校はラグビーもごさいます。アメフトも、アメフトは人数が少なすぎて、分母が少なすぎて入れてないんですけども、アメフトも、アメリカなんかでは当然ながら非常に事故率が高い。ラグビーもそれに近いような形で起きているということですね。

ということが見えてきた。非常にシンプルな計算方法によって、全国の深刻な実態が見えてくると。こういったことをやるのがわりと好きでやってるとい

とです。

これまたマスコミがやっぱり全国の情報だとしっかり取り上げてくださいますので、それで2011年から2012年にかけて、一気に死亡事故が0件になるというようなことも起きました。

さらにもう1つ考えなきゃいけないのは、これがハラスメントにも関わってくることなんですけれども、重大事故って、単にスポーツで死ぬというよりも、その背景に暴力、根性の世界があって、それで身体能力が低下し、そして亡くなっていくと。つまりいくつかの事例、柔道でもそうですけれども、亡くなる直前ってふらふらなんですよ。ふらふらなまなま投げられて、頭を打って死んでいるという。

これはつまり柔道の投げ技の問題とかって言うよりも、何でこんな首が座らないような状況でやるんだという。熱中症なんかもそうですけれども、何でこんな炎天下でスポーツをやるのという、そういった問いが生まれてくると。それが今回のハラスメントというところにもつながってくるかなというふうに思います。

なかなか学校って、ハラスメントのようなものであっても、それを「教育」の文化が、隠してしまう。練習しなきゃ盛り上がりえないよねとか、いろんな理屈がついて、隠されていく。『教育という病』という本を書いたことがあるんですけども、まさにもう教育という名がつくと、こういった異常なものが、法的に、あるいはガイドライン的にまずいものが全部乗り越えられていってしまうというふうに感じます。

これはインターハイですね、甲子園ばかり悪者になってますけれども、インターハイもほぼ同じように、オリンピックもそうですね、やっちゃいけない時期に、教育活動の全国大会を一番やっちゃいけない時期にやっているという。当然だから熱中症指数でももう運動禁止のレベルで皆さん活動しているという。だから日本の部活動、夏の部活はもう基本的に全部ハラスメントじゃないのかなというふうに思っています。

同じようなことは、組体操のようなものでも言えて、これも2014年から30本ぐらい、僕も記事を書きました。それでもう巨大なものだと高さ7m、そして200kg、負荷200kg。大人の場合には、高いところに上る時には、囲いを作って落ちないようにしなさいよなんてやってるんだけど、学校の場合には、グラグラの土台の上に乗かって、しかも崩れようが、どうであろうが、みんな拍手して涙するっていう。本当に教育っていう活動になった途端に、もうリスクというのが過小評価されていくという実態があります。

今年の1月に、僕、実家に帰ったんですけども、福井県なんです、実家が。実家に帰った時に、「中学校の校訓は何だったか」という話になって、思い出せなかったんで、ネットで調べたんですよ。そしたら、「限りなき前進、忍耐・努力・根性」。

もうまさに組体操や部活動のやり方そのものやないかと。もうただただ炎天下で運動し続ける、ただただ重いものを耐え忍び、怖いところによい登っていくという、忍耐、努力、根性で限りなき前進していきなさいという、この学校文化です。教育というのは、リスクを前にして、じゃあどうしたらいいんだろうって考えなきゃいけないんですけども、もう考えなくて、とにかく忍耐、努力、根性でよい登っていきなさいというのが日本の教育。

組体操も幸いにして、マスコミがたくさん取り上げてくださって、国も動いてくれて、事故は大幅に減りました。

こういった問題提起をするたびに、定番のリアクションというのがあるんですよね。それを僕、ひと言で言うと、「魅惑モデル」と名付けられると思っていて、どういうことかと言うと、例えば、1カ月ぐらい前に、見たこともないような長文のメールが届いたんです、元校長さんから。どーっと書いてあって、何が書いてあるかと言うと、部活動がいかに素晴らしいかだけが書いてあるんです、ずっと。

部活動の良さについて、今ブラック、ブラックと言われるから、いやいや、こんなにいいんだよって。つまりプラスをたくさん積み重ねるわけですね。これ合計値としてはプラスになるんですよ。部活ってやっぱりいいよねって。

でもマイナスが全然減っていないという。リスクを直視して、リスクを減らすということをやらずに、プラスだけを言えば、合計値としてマイナスが消えてプラスになる。これは組体操であれ、何であれ、学校内のリスクを、つまり教育という名の下のリスクを出すと、当然ながら、それを真面目に教育だと思ってやっている、教育だと思って受けてきた人はハラスメントなんて思わないわけですよ。いやいや、あんなにいい活動はないと言って、みんなプラスを一生懸命言うとか。

でもこの潜在的にあるこのマイナスを減らさないといけないわけです。僕が提唱する「持続可能モデル」というのは、マイナスだけを減らしていけば、当然ながら、プラスは相対的に浮かび上がりますよねという、部活動も組体操も、これだけ過熱してきたからには、

当然いい活動なんですよ。であるからには、あとマイナスだけ取れば、きっと自ずといいものになるだろうと。そういうふうな発想を持って、啓発を進めています。

教育というのは、辞書に書いてあるとおり、望ましい活動なんだということなんですよ。これが非常に厄介で、リスクの対概念というのはベネフィットですね。リスクが大きいのか、ベネフィットが大きいのかって、私たちは常に天秤にかけながら行為を選択しているんですけども、教育というのは、つまりベネフィットそのものなんですよ。その時にどうしてもリスクというのが過小評価されてしまう構造になっているというのが教育なのかというふうに捉えています。

同じようなことは、今度は子どもへのいろんな暴力被害でも言えるんですけども、これは5年分かな、5年分の懲戒処分の件数なんですね、学校の。体罰が結構5年分で6,000—7,000件ぐらいあるんですけども、大事なのはその内訳なんですよ。

飲酒運転の場合には、2件に1件が懲戒免職。わいせつも2件に1件免職です。ところが体罰はというと、この7,000件近く起きていて、免職1件だけです。これがまさに教育だからなんですよ。何で体罰が免職にならないか。何回体罰で懲戒処分を受けて、また鼓膜破ったのと言っても、いや、指導の一環でつい力が、勢いづいちゃってみたい、いわゆる行き過ぎた指導、でも指導だよという、この文脈がついてくるので、常にリスクとか、実際に起きちゃったけどというものが過小評価されていくというのが教育だというふうに考えます。

それは『学校ハラスメント』という本にも書きましたので、ぜひ手に取っていただければありがたいです。

ちなみに余計な話ですけどね、このわいせつ、わいせつは当然ながら、教育の一環じゃないですよ、今の感覚では。僕ね、新聞記事を調べたんです、20年ぐらい前と30年前の。そしたら、わいせつは教育の一環って書いてあるんですよ、それが。どういうロジックかわかりますか。

確かに僕らもそう言ってました、かつて。つまりキーワードは、「スキンシップ」。スキンシップでしただけで言って、そう言い逃れをして、だからやっぱり処分できないという事例が結構出てくるんですよ。まさに文化心理学、社会心理学の領域でもありますが、社会認識というのはこんなにも10年、20年の間に変わってくるんだと。今時スキンシップって言われた

ら、本当にただ非難を受けるだけですけれども、かつてはそれが通じ得た時代があったということですよね。

さてここからは、部活動だけに焦点を絞ってお話をしたいと思います。学校のウェブサイトを見ると、こんな廊下を走る、階段を駆け下りる、しまいには卓球をしているという学校もあるんですけれども、確か廊下というのは走っちゃいけないはずだったのに、部活動の時間になった途端に、校則破りが起きるんですよ。

しかもその校則破りが嬉しそうに学校のウェブサイトに掲載されているという。どう考えてもあり得ないことが起きている。もうそれぐらい部活動はこうなんだと言って、それ以上相対化することはできない状況に、まさに文化になっちゃっているところがあります。

何で廊下を走るのかというと、これは教育制度的な説明になりますけれども、部活動というのは教育課程外、すなわち制度設計がないということなんです。授業で体育館にクラスが集まり過ぎて、場所がないから廊下を走るということはないですよ。場所がなければ、体育館か学校をもう1つつくるんです。

でも部活動はそうならない。なぜなら、教育課程内のものとしては設計されていないから。ただ指導要領に学校でやりましょうとだけ書いてあるので、学校ではやるけど、それ以上の制度設計が何もできていない。人、もの、金、時間、場所、情報、そういった資源が何も用意されていないという中で部活動をやる。だから廊下を走るんだというふうに言えます。

教員養成系の大学では、当然教育課程外の部活動を教えるわけはありません。運動部顧問の半数が素人だということもわかっています。

そういう中、群馬県では、高校生が、ハンマー投げに当たって死んだということがありました。そして顧問は、しかも帰っていたと。授業中でこんなことはないですよ、先生が帰ってましたなんていうことはないけれども、部活動だと、こういう緩いことが起こり得る。

グラウンドでハンマー投げをやっていて、ハンマーが左に逸れて、隣接するサッカーゴールの近くでサッカー部員が亡くなりました。

どういう意味で制度設計がないかというと、場所に関してですけど、授業用のグラウンドに部活動の各種競技を無理矢理押し込めてるんですよ。だからほぼすべての全国の学校で、野球部のボールが常に飛んでこないか後ろを見ながら、みんな陸上やサッカーをやっているという。これ自体、まずもって全体におか

しいんですよ、設計上。でもそこでけがをすると、あんどどこ見てたんだという自己責任に落とされて終わっていくという、非常にまずいわけですよ。

これは東京の高校の水泳部員2,000人に調査をしました。それで、これはコストをかけてやったんですけれども、プールへの飛び込みでプールの底に体を打ち付けたことがありますかと尋ねました。そうすると、3割があると、3人に1人があると答えているということです。

授業用のプールって何かと言うと、浅めに設計されているんです、溺水防止用に。学習指導要領では、小中学校では飛び込みスタートは禁止です。高校も、新学習指導要領では禁止になりました。ところが、それは授業なんですよ。

でも授業用の浅いプールで、部活になると、授業では危ないから禁止されてたものが、部活になると許可されるんですよ。そして110 cmのところから170 cmの子どもが飛び込んでるんですよ。当然ながら体を打ち付けて当然で、実際には3人の子どもが後遺症を残す事故に遭っています。これで大会が盛り上がったとして、僕は全然喜べないという。マイナスを削らずして、大会が盛り上がったところで、やっぱりそれはサステナビリティが全然ないんじゃないのかなというふうに感じます。

ちなみにオリンピックでは2020年もそうですけれども、水深3 mあります、飛び込み。あるメダリストが言っていたのは、私は学校のプールに絶対に飛び込まないと言っています。それはもうそこには飛び込んじやいけないことを教えるのが教育じゃないですかと。まったく僕は同感であります。

学校の前を通りかかると、部活動の過熱を、まさに勝利至上主義じゃございせんけれども、過熱を象徴する垂れ幕が下りています。最近はどうカラーで下りるような、すごい学校だと、もう垂れ幕で学校が見えない。こんな状況。

塾の前を通りかかると、このとおり看板に偽りなしなんですよ。学校って何やるところだとなつて、教育課程外のやってもやらんでもいい部活動で一生懸命垂れ幕を下ろして、みんなで頑張らないかんねと言って過熱していった、何やってるんだらうって、どこまで違う方向に行っちゃうんだらうなというふうに思います。

教員の調査でも、10年間で最も増えた仕事って何かっていうと、中学校だと土日の部活動指導がそれぞれ1時間ずつ増えたというふうに出ています。これは

神奈川県調査なんですけれども、非常に興味深くて、同じ質問を理想と現実に分けて、教員、生徒にしているんです。

神奈川県の調査で、部活動って1週間で何日やるのかということで、6日以上というのは理想だけでもけっこう多いのですが、現実はずっと増える。生徒も先生もです。つまりお互いに休みたんだけど、休めない。なぜなら、来週大会があるからということですよ。もう大会が毎月のように入っていて、休めないということが起きています。だから大会をとりあえずいくつか減らせば、ずいぶん楽な部活になるんですけれども、実際には、もうお互いに首を絞め合っているという現状です。

そして今起きているのが、先生の働き方が大変だから、外部指導者に投げましようということなんですけれども、これまた神奈川県の調査で、同じ質問を外部指導者にもしてるんですね。そうすると理想でどれくらいやりますかという、6日以上というのが理想でこれだけ外部指導者のほうが多くて、1日の時間も2時間以上というのが外部指導者のほうが多いわけですね。

何でかと言うと、外部指導者って、ただのやりたいだけの人がやってますので、大学のスポーツ科学部を出た専門家がやってるというよりも、昔野球をやったよという地域のおっちゃんがただ教えてるという。だからある意味、先生よりもわけが悪いというか、よりハラスメント的になっていくという。何とも今、働き方という意味ではいいんだけど、果たしてこれで子どもに対するハラスメントというのが減っていくのかどうかというのは非常に疑問を持たざるを得ません。

あらためて中学校や高校における、教育課程内の国語の授業を思い起こしてみるとわかりやすいんですけど、楽しいからと言って、暴走するかということです。すなわち、例えば国語の授業をやって、今日の国語の授業は子どもの目が輝いていたなど。だからどうだい、君たち、土日も来ないかといって、あと朝国語と昼国語もやっちゃおうかってならないですよ。

先生は50分の中で最大のパフォーマンスを発揮するという「労働者」になるんですけど、授業中だけ。なのに、授業中を終わった途端に、もうたくさんやったほうがいいんだよという、「教育者」に変容することなんです。たくさんやったほうが子どもにいいし、団結力も生まれるしみたい。もう合理性だとかそういったものは全部吹っ飛ぶ。忍耐、努力、根性、

限りなき前進の文化が訪れてくるというのは、授業以降の話なんですよ。

指導要領で、授業は本当にもう内容も時間数も決まってるわけです。そうするとブレーキがかかるんですよ。ところが部活動はそういったブレーキがかからないわけです、制度設計がないものですから。

じゃあこれから、タイトルにも付したように、未来をどうして考えたらいいのかということですけども、この部活動を、巨大な部活動をもうトップアスリートは民間のクラブチームで、それこそ今、フィギュアスケートでは始まりましたが、もう小学校の頃から民間のコーチですね。あるいは卓球、水泳、体操など、そういったものも民間のコーチが育てているというのが、答えがもう出ているんですよ。

だからもうトップアスリートはもうこっちでやってもらって、部活動そのものはぐーんと規模を縮小したほうがいいだろうというふうに僕は考えています。今、ガイドラインは週5日というふうになっています。それ以前は、週6日以上というのが半数ありましたから、一応週5日まで減らしたんですけど、僕は週3日ぐらいまで減らさないと、いろんなことができないんじゃないのかなと。

週3日に減らせば、外部に投げやすく、質の高い指導者に投げやすくなるし、何よりも半分にすると、月水金が野球部で、火木土がサッカー部とかで分ければ、廊下を走らなくて済むという。水深のある大学のプールや市民プールを、それぞれの中学校が順番に使うとか、そういうふうないろんな形で規模を縮小すれば、子どもの安全のためにゆとりを持って設計が組めるんだけど、現実にはなかなかそうはいっていないということです。

じゃあこのあたりで終わりにしたいと思います。ちょっと延びちゃったかもしれないですけど、失礼いたしました。ありがとうございます。

(大塚) 内田先生、どうもありがとうございました。非常にわかりやすく、いろいろと考えさせられるお話でした。私自身、アメフト部の部長は、アメフトの経験をまったく持っていない素人の状態でお引き受けしたという経緯もありますので、身につまされる話でした。私は、その部長の経験、私自身の部活の経験などから、部活動の素晴らしさをむしろ吹聴するほうでしたので、あらためてそのリスクの部分に留意していかねばならないことを痛感した次第です。

それでは続いて、尾見先生、よろしくお願いいたします。

(尾見康博) 山梨大学の尾見と申します。内田先生ほどではありませんが、私も日本教育心理学会にはあまり熱心に参加してこなかったものですから、若干のawei感を感じつつ、お話を進めようと思います。

先ほどの内田先生の話で盛り上がったネタに、内田先生の出身中学の校則が、限りなき前進で、忍耐、努力、根性、というのがあったと思いますが、その校則の下で育った内田先生、と考えるといかに教育効果がないかみたいなのがわかったということになりますね。さて、実はこれから話すこともほとんど内田先生が話されたことと結論が似ていて、つまらないかもしれませんが、若干違った観点をお話しできればと思います。

昨今の流行り言葉である主体的な学び、学力の3要素の中にも3つ目として入っていると思いますが、この「主体的な学び」を絡めて、かつ今回ハラスメント防止委員会の企画としていただいたので、ハラスメントという観点から、私が今までやってきたこと、あるいは感じてきたことを整理しながら話してみようと思います。題して『「主体的な学び」はハラスメント構造に風穴を開けられるか』です。

さて、先ほど内田先生からご紹介いただきましたが、私、3月にちとセプレスというところから、『日本の部活』という本を出しました。じつは現在、学会特別販売ということですよ。もしも今日のこれからの話に興味をお持ちになったとしたら、その本を注文していただければ大変ありがたいです。

この本でもそうですが、私は部活という言葉を使っています。それは部活動と言ってしまうと、部活という言葉からイメージするものとちょっとかけ離れてしまう面があるからです。

そのせいか、教育学のほうでは、運動部活動というふうな呼称がわりと一般的に使われているかと思います。でも、例えば典型的にはブラスバンド部、吹奏楽部というのは、文化部の中の運動部だとよく言われているように、運動部、文化部で区切ってしまうと、いまひとつなのではないかというのがあり、私は部活という言葉を使っています。いかにも部活らしいものを部活とするというのは、トートロジーの極みですけども、別の言い方をすれば、部活には、練習という言葉が馴染むというのがあります。

例えば茶道部の練習ってあまり言わないですよ。あるいは天文部で「今日練習行こうぜ」とは言わないと思うんですけども、多分吹奏楽部とか合唱部だったら練習すると思うますし、あとは全国大会の

コンクールとか、トーナメントとか、コンテストがあるものを私は部活と定義づけています。

私はたまたま運よく2009年から2年半ほど、アメリカへ家族で、子ども連れて住んだ経験があって、そのせいで部活をある程度相対的に見る機会があったのですが、その経験がそもそもこういう研究を始めるきっかけにもなりました。

その後もヨーロッパやアジアの国にも行って話を聞いたりしていますが、基本的には部活というのは、国際的に見て、極めて特殊な課外活動であるということとはほぼ間違いないです。順に説明していきます。

あらためて言うまでもないことですが、内田先生がお話しになったことに加えて、生徒が事実上、入部義務となっているところが多いことや、教師が事実上、顧問を義務づけられているということ、顧問が当該競技の経験がまったくなかったり、まったくなくて、指導研修も一切なかったり、部活は基本的にはそういうことになっています。例外があることはもちろん承知しておりますけれども。

それからトーナメントです。例えば野球の大会というのは部活レベルではトーナメントでやることが多いけれども六大学はリーグ戦になる、といった言い方をしますよね。つまり、大会の形式というのは、トーナメント戦か、リーグ戦かというふうに分けられることが多いと思うのですが、元々の英語では、リーグ戦というのもひっくり返してトーナメントと言うんです。日本で使っているトーナメントという言い方は、ある種の和製英語なのですね。英語で言えば、ノックアウト型のトーナメントというものを、日本ではトーナメントと呼んでいます。

ややこしい話をしましたが、その日本型のいわゆるトーナメント、われわれが日常馴染んでいるトーナメントというこの形式がわりと当たり前になっていますよね。野球を中心に、多くのスポーツが、特に部活のレベルでは、1回負けたら終わりというこの形式を採用しています。全国大会で優勝するまで1回も負けるわけにはいかない大会を中学生レベルでも新人戦から、春の大会、それから夏の全中という大会まであります。高校も同じように、年に3回大きな大会があります。中高問わず有力校などであれば、もっとたくさん公式戦があったりするうえ、年がら年中練習試合もしています。いずれにしても、大会のほとんど、しかも重要な大会であるほど日本型のトーナメントになっていて、つまり、1回負けただけで終わりなので、常に負けない試合が用意されているという特徴があります。

日本の部活の場合、高校野球が甲子園、バスケットボールが代々木、ラグビーが花園とか、「聖地」がありますよね。「聖地」でやることを夢見て、そのスポーツをするようなことがあると思いますが、それは必ずしも外国では普通ではなくて、日本型のトーナメントではないからというせいもありますが、一般的にはホーム・アンド・アウェーの方式を取っています。日本のプロのサッカーや野球は基本的にはその方式を採用していますよね。外国では、その方式で小さいうちからやっていることが多く、日本の部活というのは、試合形式という意味でも極めて国際的に特殊といえると思います。

それから先ほどの内田先生の話にも出ていた、練習時間が長いという話ですが、国際調査の結果を鵜呑みにしない方がいいです。働き方改革の流れで、日本の教師がいかに授業以外の課外活動で忙殺されているかといったことを示す国際比較の調査結果が引用されることがあります。確かに日本の教師の超過勤務はすごく多いです。2位のマレーシアだったかに比べて2倍以上だという感じで、ほかはもうほとんど2時間以下というそういう世界から、日本だけすごく突出しているのですが、私から言わせると、それでも非常に過小評価をしているんです。その調査の質問で聞いている内容が、学期中の1週間の放課後に働いている時間になっているからです。

日本では、長期休暇というのは、夏休みを中心に、部活の強化期間と称して、むしろ練習時間が多く、1日練習とか、遠征とか、合宿とかという形で、すごく濃密にスケジューリングされています。

でも海外では、まったくそうしたことをやらないわけではないにしても、たとえば日本の部活の話をすると、「夏休みって休みなのに？」みたいなことを言われるんです。

つまり、そういう国際調査をする主体からしても、夏休みにまさかそんなにたくさんやっていると思わないので、普通の学期中の1週間の放課後に働いている時間ということで比較して、日本は多いね、で終わってしまっているということです。

そうすると、日本の部活の特徴とも言える長期休暇での先生の働いている時間というのは完全に隠されてしまっているわけです。だからそういう意味でも、国際的な観点から見ると、特殊だということが言えるだろうということになります。

一般的に、extracurricular activities, その間に sport を入れることもあります。そういう次元名で国際比

較がなされているわけですが、それでは部活の本質は見えないだろうと思うわけです。

『日本の部活』ではこれまでお話ししてきたことも書かれています。基本的には勝利至上主義、気持ち主義、一途主義、減点主義という4つの主義で整理してまとめています。今日の話と重複する部分もありますが、ここでは必ずしも4つの主義をお話しするつもりはないので、とりあえずご興味があつたら手に取ってくださいということで留めておきたいと思います。もちろんこれからの話にもこの4つの主義に関連づくような話はいたします。この本のまとめを言ってしまうと、部活には日本文化が凝縮されているということです。

さて、部活では、ハラスメントと言え、先ほどの内田先生の話にもあったとおり体罰というものがあるわけです。ここで動画をお見せします。ご覧になったことのある人もいるかもしれませんが、剣道部の練習中、後ろのほうで指導者が、こういう足蹴りをしているという。

つぎはバレー部ですけど、明らかに取れないボールを出して、取れないということの罰で強く投げつけるのですね。アタックでもなくて、ただ強く投げつける。ほとんど何の練習にもなっていませんね。

部活の体罰の問題が大きくクローズアップされたきっかけになったのが、例の桜宮高校のバスケットボール部のキャプテンが、激しい体罰を受けた後に自殺に追い込まれたという事件ですが、これらのどちらの動画も、その事件後にネット上に流れたものです。桜宮事件も衝撃でしたが、その後もあれだけ体罰はいけないということがマスコミ基調としても一応コンセンサスでし、教育現場にも文科省から通達がさんざんなされたにもかかわらず、こういうのがずっと継続しているということが私にとっては衝撃でし、不思議だったわけです。

つぎに、『日本の部活』でも引用したネタですが、授業で体罰の経験があつたら教えてほしいと聞いたんです。そうすると、例えばこういうのが出てくるわけです。「中学時代、剣道部の練習中、少し遅れるだけで怒鳴られ、竹刀で叩き倒される。外へ投げ出され、雪の中、胴着で血のにじむ素足のまま素振り」。

大事なことなのですが、実はこのような体罰を受けて、納得しているのです。「先生は徳の高い人だったし、厳しいだけではなく、優しくもあった。体罰ではなく、指導と受け止めている。信頼関係が築けていれば、ある程度の強い指導は体罰とは受け取れないのではな

いか。体罰という言葉が体罰を大きくしている」といった具合に。

山梨大学の教員養成科目を受講する学部の子を対象にした調査だったんですが、中学校教員免許の必修科目でもある青年心理学の授業の中で、しかも桜宮高校の事件の後に、こういうのを平然と書いてしまうことが、私には衝撃だったわけです。

この調査の回答で単位が左右されるとは受講生も当然思っていないと思いますし、単位とは無関係であるとは伝えていますが、さすがに体罰が素晴らしいとまでは書かなくても、受けた体罰に納得していて、体罰もいろいろあるのではないかといいことをわざわざ書くというのは、ネガティブな評価につながると恐れているのではないかと思うんですね。要するに、社会的望ましさが働いているはずではないかと思うんです。ですから、当初はこのような赤裸々のエピソードは出てこないとふんでいたところにいくつもいくつも出てきてしまったということに衝撃を受けたわけです。

さて、これはつい最近、2019年の8月27日にネットで流れていた情報です。

「新潟県教育委員会は27日、部活動の指導中に女子生徒に体罰とセクハラ行為をしたとして、県立高の40代の男性教師を減給10分の1、2カ月の懲戒処分とした。県教委によると、昨年7月ごろ、自身が顧問を務めるバレーボール部の練習中、女子生徒の右太ももを強く叩いた。また、昨年4月ごろからは、複数の部員に『腰を落とせ』『お腹に力を入れろ』などと言いながら腰や腹を触っていた。教諭は『指導に熱が入ってしまった』と話しているという。」

先ほどの内田先生の話ではないですが、指導が行き過ぎたとか、熱が入ってしまったと言い訳をして、2カ月の懲戒処分で済んでいると言ってもいいかもしれません。

2012年の12月に桜宮高校の事件があって、確か2013年の1月に報道されたと記憶していますが、それからいくら「体罰はだめだよ」と「きれいごと」として通達されたり指摘されたりしたとしても、ずっと体罰は続いている。本当に構造的な問題だと思いますし、繰り返しますが衝撃が大きいわけです。

次に、私の身近なところの動画をお見せしますが、先ほどのような凄惨な体罰の話ではありません。では体罰でなければいいのか、ということ考えた時に、参考になるかもしれないシーンが非常に身近にあるという一例のつもりです。これは今、大学1年の息子が中学校の時のバスケットボール部の練習試合の風景の

ひとコマです。

ここの緑の彼がここでカットされてしまったのですね。これは先生の声ですけれども、よくないところはいくつもあります。

まず、「へらへら歯出して笑ってよ」という発言は顔の形態のことになります。「何やってるんだ、てめえは」とか「昨日一体何練習したんだ」などは罵声や暴言の類いです。たまたまこれは、動画を撮った時のものを切り取って、今日お見せしたわけですが、お子さんが部活の試合に行って、それを見に行かれている親御さんであれば、今は例外も多いと思いますが、この動画はそれほど強烈なシーンではないのではないかと思います。

私はこの動画の後、娘や息子の部活を親として見に行きましたし、それ以前も息子が少年サッカーをやっていた関係でそれも見に行っていました。似たようなシーンに幾度となく出くわしましたが、あの先生ひどいなという雰囲気にはほとんどなりませんでしたし、だからこそなのかもしれませんが、叩いていないとはいえ、ヤクザまがいの脅しを生徒にするような顧問も珍しくないのが現実でした。

マスコミなどで問題になりやすいのは主に体罰なので、その場合、暴行罪とか傷害罪が相当するわけですが、それが指導の一環として薄められてしまうという話を少し前にしました。もちろん怒声や罵声に傷害罪が適用されることはあるのですが、なかなかそこまではいかないというとき、それをどのような問題と捉えるかと考えた時、そして、ハラスメントというお題をいただいて思いつくのは、やはり人権の問題になります。人権という言葉です。

明らかにこの動画も人権問題だと思うんです。しかも学校で人権について教育しているんです、どこまでやっているかわかりませんが。親はあまり人権という言葉を使って子どもをしつけないと思いますが、学校で教育しているはずの人権が、どうして学校で軽んじられているのかという疑問が生じてきます。

抄録にも書きましたが、現役の大臣が「セクハラ罪という罪はない、あなたたちもよく知ってるよね」と言ったりしているのですが、人権という言葉そのものが垢にまみれてしまっている、安っぽくなってしまって、人権問題というのが問題になりにくいという、不幸な事情があるような気がしています。人権問題として広く周知されないのはどういうことなのだろうと思うわけです。社会的には人権という言葉にいろいろなイメージがあってしかたがないにしても、少なくと

も学校の中で人権問題が周知されないのはなぜだろうという、素朴な問いが出てきます。

ハラスメントという言葉は、セクシュアルハラスメントの問題からはじまり、日本でも非常によく使われる言葉になったと思うのですが、よく「ハラスメントは受け手の問題だ」という言い方がなされます。ハラスメントを受けた人が嫌だと、ハラスメントだと思ったら、それがハラスメントである。

する側はそんなつもりはない、内田先生のお話の例でいえば、「これはスキニップのつもりだ」「円滑にコミュニケーションを図るために触ったに過ぎないんだ」というような弁解をしても、相手の女性が不快だと思ったら、それはハラスメントなのだという説明がよくなされると思います。ただ、部活の問題をハラスメントで考える時に、それではうまくいかないことが多々あるのではないかとこのことをつぎにお話しします。

先ほど述べたとおり、学生が体罰に納得してしまっているという現実があります。納得しているどころか、体罰が自分を作ってくれるとか、体罰は体罰と言えないのではないかと、体罰という言葉は自分の言葉と社会的な言葉とで上手に使い分けるというテクニックを持っている。それどころか、体罰をした先生に感謝までして「先生は徳のある人なんだ」と言ったり、殴られて足が血でにじむようなことまでやらされているにもかかわらず、感謝までしてしまうことまであるんです。

そもそも女性が男性のセクハラに対して、その逆もありますが、ある種の権威の、非対称の権威構造の中で、嫌だと言にくいということはよく言われており、それと同様に、中学生や高校生は、そもそも先生に対して嫌だと言えるのかという問題があるわけです。

ハラスメントが受け手の認識の問題だとすると、なかなか見えにくくなってしまっている部分もあるのではないかと、私が今回ハラスメントという観点でお話をもらって、考えたことです。やや強引なまとめですが、部活の指導が、刑罰の対象でもなくて、ハラスメントでもなくて、人権問題とも言えないというのはどういうことだといった感じです。

さて、私は『日本の部活』という本の中で、部活の問題を文化の問題として捉えたわけですが、文化の問題として考えた時にももしろいと思う話を2つほど紹介したいと思います。

1つ目は、儒教の影響で、長幼の序という規範が日本社会にはあり、先輩後輩関係とか目上の人を敬うと

いったことが是とされている、徳とされている、と言われることがあるということについてです。私に言わせれば、これが日本では過度に運用されているのではないかと。そして、それが特に中学校の特に部活で急激に本格化するのではないかと。

長幼の序の母国である中国では、もちろんまったく先輩を敬わないわけではないのですが、日本のように、先輩の言うことは絶対とか、先生の言うことは絶対とか、強い部活の顧問だったら神様みたいに言われるといったことはほとんどなく、少なくとも日本ほど極端な関係にはならないということを、中国人の留学生などと話をしたことがある人だったら、耳にしたことがあるのではないかと思います。

朝鮮半島は日本に近いような先輩後輩関係があると聞きますが、中国から見て辺縁地域である朝鮮半島とか日本では、そういう思想が先鋭化したのではないかと、いった思いつきレベルの仮説を私は持っています。

また、顧問がそこまで絶対的な権威を振るわなかったとしても、先輩後輩の関係だけで、非常に後輩が萎縮するような構図を作っているような部活もあります。これもひょっとしたら、実際皆さんも経験されているかもしれません。

すこし前までは、部活の顧問が顧問として監督しなくても、子どもたち同士でやらせればよいというような部活もかなりあったはず。そうすると、それは教育の問題というよりも、先生も知らない先輩後輩の中だけで、先輩がひたすらしごいているといったことになります。しかも勝手に内部規則を作っていて、たとえば、3年生になるまでは、部活のカバンにキーホルダーをつけてはいけないとか、なぞめいた規則をたくさん先輩が作って、それが年々受け継がれていって、それがどんどん増えていくと、部活もあると聞きます。

話があちこち飛んで恐縮ですが、そうしたことも含め、長幼の序のようなものが日本の部活の中では非常に過度な、過激な形で運用されているし、それは長幼の序の母国でも想像だにしないような運用になっていると、部活があるのではないかと。思うわけですが。

理不尽な指導や疑問に思うような指導を先生がする理由、あるいは無条件に先輩を敬う必要性の理由としてよく挙げられるのは、社会勉強のため、と言われることがあるかと思うのですが、この「社会」というのがけっこう曲者でして、現在の社会というのは、その

顧問が若かりし頃の「社会」とは変わってるかもしれないし、もうすでに変わった後かもしれないのに、「社会」というものを一面的に捉え、先輩後輩の序列ということがものすごく一面的にクローズアップされて伝達されている可能性もあるのではないかと思うんですね。

そして、こういったことは、徹底的に主体性を抑圧する仕組みとってよいのではないかというふうに思うわけです。そのように考えると、これは慣習だ、これは文化だと中学生や高校生本人が相対化して見ることで、これは体罰なのだと理解できるはずなのに、自分が部活にいる時、部活のメンバーとして自分を見る時には、体罰には見えないことになる、そうせざるをえないと思うわけです。自分が完全に第三者にいる時には、それは体罰だと理解できているけれども、それが自身の実体験と結び付けられないということにつながっているかもしれないなどと思うんです。

もう1つはけがの話です。先ほどの内田先生の話とかなり密接に関わるわけですが、部活でけがをしたり、死んだりというのが非常に多いわけです。これはアメリカで生活した時に感じたことなのですが、日本のやり方に馴染んだうえで、アメリカで子どもたちのスポーツを見ると、なんて甘っちょろいんだろうと思うんです。

痛がってすぐ泣くし、そうしたときにすぐ退場させるし、といったことです。だんだんそれに慣れてくると、今度は日本の部活にビビるわけですが、そういう意味ではアメリカはけがに対して敏感だといえるように思います。

逆に言うと、日本の部活というのは鈍感、いい意味で言うとかげに対して寛容です。けがしてなんぼとか、けがして一人前とか、けがを恐れるな、とか言いますよね。

野球で大船渡高校の佐々木君の県予選の時にも話題になったことと関係していますが、明らかに肩とか肘の問題としてリスクがあるにもかかわらず、投げさせた結果、肩や肘を壊してしまった時の言い分として、「本人が投げたいと言ったからやらせました」とか「本人に聞いたら大丈夫だと言ったからそのままプレーを続けさせました」などと言います。結果的に、その後の選手生活を棒に振ってしまう可能性を高めてしまったり、重症でそのまま救急車を呼ぶようなはめになったりするということがよくあるわけです。

そういう時に限って、生徒本人の思いが、といったことを言って、あたかも自主性を尊重したようなこと

を言うのはどうかと、ふだんは自主性を尊重していないのに、と私は思うわけです。

Figure 1 は、熱中症の発生件数ですけれども、下は屋外スポーツで、上は屋内スポーツです。これは、エアコンがないところでお年寄りが熱中症で亡くなったというニュースと共通しているものですが、部活の屋内スポーツでも当たり前のように熱中症で搬送されているという実態があるわけです。

実際に先ほど柔道事故が5月から8月に多いということを内田先生がおっしゃっていましたが、8月を中心に夏休みというのは甲子園をはじめ全国大会が集中して実施されています。例えば地方予選であれば、中学校の体育館とか、高校の体育館でやるわけです。公立学校の多くは体育館にエアコンがないわけですね。そうすると、当たり前のように熱中症のリスクが高まります。外は40度に近いので、大きな扇風機をいくつも回したりしているのですが、熱風機と化しています。しかも日本の集団競技では選手交代をあまりさせない傾向がありますし、けがを恐れるなどか言うものだから、熱中症ぎりぎりまで選手はプレーしますし、そのリスクはますます高まっているということになります。

最後の話です。内田先生などが社会的にいろいろ発信しているおかげもあって、世の中は少しずつとはいえ変わっていると思います。それこそ佐々木君が結局投げなかったことに対して、賛否両論が出るというだけで、一定程度前進していることは間違いないと思います。

以前だったら、あの監督は叩かれて終わるのではないかと思うわけです。そういう意味では、野球だけでなく、いろいろな競技分野でそうしたことの理解が浸透し始めていることは間違いないと思います。しかし、根本的な構図はまだ変わっていないとは思えず、それは先ほどから例を挙げているとおりです。

主体性とか自主性が大事であると言われているわけですが、そういうものが身に付くのかと考えた時に、まだ希望は持っていません。主体性の前に正解を厳密な形で迅速に求められる日本の学校、ということなど、部活の外側の問題もありますし、忖度という表面的な自主性みたいなことでお茶を濁したりすることも大人社会を含めあるわけです。

要するに、本人が「プレーを続けたかった」というのは、続けたかったと言わないとまずいだろうという生徒としての正解があって、それを生徒たちはわかったうえで、「そうさせてください」とか「投げさせてください」というのではないかと思うんです。もちろん、

Figure 1 スポーツ種目別熱中症発生数（2012）（日本スポーツ振興センター，2013）

本当に投げたいということもあると思いますが、それは本人が若いから、将来のことに思いをいたすよりも、今が大事だということもあると思います。でも、それだけではなくて、ここで投げたくない、投げないほうが自分はいいと冷静に判断したとしても、それを言ったら、この顧問は自分を起用してくれないのではないかなどと考えると思うし、そういったことをひくくめて、自主性というのは、圧倒的な非対称の権威構造の中では生まれにくいのではないかと思うわけです。

教師や部活の顧問が生徒の主体性を認められるかという問題は、まさに今、突きつけられているのではないかというふうに思います。「なんでこういう練習をするんですか」「なんで来週また同じような練習試合をするんですか」「こういった練習よりも、こういうのをYouTubeで見つけたんですけど、こういう練習方法を取り入れることというのは難しいでしょうか」とか、そういったことにまともに対峙して顧問とかが受け止められるかということかと、私は思っています。もちろん練習時間や練習日数についての意見も含めてです。

学習指導要領には、部活動のことがほんの少しだけ書いてあります。ご存じの方も多いと思いますが、部活というのは、とにかく生徒の自主的、自発的な参加により行われるということなので、本来はアクティブ

ラーニング真っ青なぐらいの主体的な学習の場のはずです。

以上のことから最後のひと言はこういうことになります。主体的学びの効果、学力の3要素の3つ目に出てくるこの効果というのは、部活の今後を見れば一目瞭然になるのではないかと、ということです。

つまり主体的な学びというのは、とりあえず授業内で、カリキュラムの中でそこそこ認められたとしても、それを学校の外側で発揮できなければ、その教育的意味は薄いわけですから、カリキュラムの外側で、しかも学校の中でやっているような部活動において主体的な学びがあふれ出るようにならなければ、学校の外側にまで適用されるはずもないだろうというのが私の最終的な今日の話の結論です。以上で話を終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

（大塚） 尾見先生、どうもありがとうございました。それでは続いて、金子先生から、指定討論をお願いします。

（金子雅臣） 私のほうからは何点かちょっと、感想も含めてお話させていただこうと思います。大きな感想としては、お二方のお話は、すごく今の大人の社会と言いますか、労働問題に深く関わってるなという感じがしてます。

具体的に言いますと、1つは内田先生がおっしゃるとおり、どうも部活が暴走してると、とんでもないことが起きてるのに止められない。設計そのものを考えなくちゃいけないとおっしゃいましたけれども、本当に今、労働現場もいろんな意味で止められない事態になっている。一番わかりやすい例で言うと、過労死の問題、何で死ぬほど働くのということです。ところがなかなかこれが止められない。何で止められないのかというのが、大きなテーマになってますね。

そことちょっと重なるなと思ったのが、内田先生が半分冗談っぽく、学校のスローガンを出しましたけれども、あれ見ながら、ちょっと、えっ？と思ったんです。私もいろんな会社に行きます。そうすると、社長室に飾ってある訓示というのが、大体、和をもって尊しとか、それからやっぱり忍耐、根性、出てくるんです。それから、やり遂げます、最後まで責任を持ってやり遂げますって出てくる。これ、かなり重なってますよね。

だからやっぱり過労死もそういうスローガンに引張られて、やっぱり止められない。何で止められないのかというと、今のスローガンの裏側にあるんですけれども、やっぱり仲間を裏切れない、仲間と一緒に頑張らなくちゃいけないという、和をもって尊しみたいなことですよ。

それからやり遂げます、最後までというのは、責任を持ってということですから、自分の責任を途中で投げられないというような、それからもちろん忍耐、根性みたいなことを言われると、やっぱり仕事を途中で投げられないんだなと。おまえ、何だ、「仕事は二の次で、家庭を優先するのか」と言われるとやっぱり男として言えないみたいなことで、それが過労死につながるような現状があるかなと。

そうすると、内田先生の出したああいいうスローガンがかなり共通して、子どもも、学校も、それからわれわれ大人の社会も、全部縛ってるなというのが1つ、かなり痛感しました。

それからもう1つは、尾見先生のほうの話なんですけれども、最後のほうでおっしゃった人権と現状の対立みたいなことなんですけれども、実はパワハラを議論した時に、これが議論になったんですね。

パワハラを法規制しようというふうに議論をやった時に、主に使用者と労働者側という意見で対立しました。対立の論点は何かということ、労働者の側はもちろん人権問題、職場で起きる人権侵害がある、だからこれはもう法律で厳しく規制せにゃいかんという主張を

しました。

それに対して経営者は何と言ったかということ、あれはたまたまAさんBさんの個人的な行き過ぎの行為だ。だからそんなに大げさに捉えずに、指導のやり方を直せばいい。だから怒鳴るのはやめればいいし、殴るのはやめようとか、そういうレベルの話でいいということで、議論になったんですね、簡単に言うと。

最終的に人権侵害というのはなかなか認められなくて、今回は罰則はなしということで、ガイドライン的なもので一応お茶を濁すと言いますかね、今後緩やかに規制しながら考えていこうみたいなところで落ち着いたんですね。

そこでお二方に質問のほうなんですけれども、最後のところでお話したところで、非常に私も懸念しているんですけれども、ガイドラインで本当に現場は規制できるか。これはかなりお二方の話にも共通してましたけれども、実はこの体罰も含めて、パワハラというのは、企業もものすごく許容してきているんですね。

ですからどちらかの方がおっしゃいましたけれども、あんまり処分はしないんです。セクハラは厳しく処分します。だけどパワハラに関しては、いや、むしろ本当のことを言うと、もっとやってもらっていい、結果が出ればいいんだというところがありますから、非常に許容しているんですね。

ですから法律もそういう緩やかにできた。じゃあどう、本当にこれで規制できるかというところがお二方への質問につながるんですけれども、この部活についてもガイドラインができました。果たしてこのガイドライン、どうやったら守れるのか、実効性があるのかということです。私も今の話と重ねて一緒に考えたいなというふうに思っているんですけれども、おそらく労働現場では、かなり難しいですね、ガイドラインでは。

なぜならば、労働法というのは、実は、ここだけの話というであれですけれども、おそらく日本で一番守られていない法律です。道路交通法と労働法って。道交法は、皆さんもそうですけども、スピード出して、捕まって、いや、失敗したな、今日は運が悪かったで済ましてしまう。

実はこの労働法もそうなんです。残業をやらせ過ぎて捕まっちゃった。いや、運が悪かったな、今後気をつけようね、の法律なんです。たまたまいろんな違反の摘発が出ますけど、あれは本当に見せしめで、とてもじゃないけど取り締まりができないのが現状で、いくつかをピックアップして、マスコミ裁きをしている

ぐらいなんです。

ですから残業が中小企業の単位で見ますと、7割が残業規制を守ってない。これが実態ですから、本当にもう道路交通法より悪いかもしれないですね。ですからそういう法律だということの規制の問題と重ねて考えなければならない。それからやっぱりこのことについては、さっきから言ってますけども、非常に意識的に、多少のやり過ぎはいいという許容と言いますかそうした流れがある。今日のお話を聞きながら痛切にそういうことも感じたんですけれども、やっぱりそれをどうやって本当に規制していくか。おそらく部活にも問われているのかなと。

そうすると、このガイドライン、果たして、ガイドライン的な発想でいいのか。内田先生おっしゃったように、マイナスを消してというのと、そこをどういうふうにリンクするのかなというのがちょっとなかなかまいちわからなかったんですけれども、本当にそれを実効性あるものにできるのか、期待していいのか。それとももっと厳しくやらないとだめだというお考えなのか。

さらにはそこに関わってくる人たち、後のほうで尾見先生が触れられましたけれども、部活の顧問、校長、もっと言えば保護者ですね、全部それぞれの役割があるから、保護者も過剰に先生にプレッシャーをかけますし、校長もやっぱり学校の名前を上げるために、垂れ幕をどんどんぶら下げなくちゃいけないわけですから、だからみんなそれぞれプレッシャーを感じている中で、誰がどういう役割を果たして本当にこれをしていけば効果的なものになるのかなというのが、ちょっとぜひお二方にお聞きしたい、最後のガイドラインの効果と言うんですかね、実効性、さらにどんな期待をされているか。その辺をどういうふうにお考えか、ぜひお答えいただければいいと思います。

どうもありがとうございました。

(大塚) 金子先生、どうもありがとうございました。それでは金子先生の指定討論に関しまして、内田先生のほうからまずコメントいただけますでしょうか。

(内田) 金子先生、どうもありがとうございました。大変、僕の中では多分一番、僭越ながら、一番大事なところを突いてくださったんじゃないのかなというふうに思いながらお話をうかがいました。

それで1つが、結局ひと言で言えば、規制できるのかどうかということだと思えますけれども、パワハラも容認されやすいし、部活動の過熱もむしろ美化されやすい、体罰でさえ美化されると。そういう中で果

たして規制できるのかということですが、それこそ尾見先生の本の中でも書いていらっしゃるし、今日も少しだけおっしゃいました、部活動じゃなくて、部活というニュートラルな言葉のほうがいいんだと。本当に教育に限らない、教育界って、本当に価値的な言葉が多くて、とりわけ心理学よりも、教育学はもうとにかく何か美しいキラキラワードが山ほどあるんですよ。もう僕はオエってくるタイプなんですけれども。

だから例えば規制とか、管理という、もうマイナスなんですよ。管理主義なんて言えば、もう確実にマイナスで、他方で、自主的と言うと、非常に素晴らしいというのが教育学です。

もちろん自主的は大事なんです、それはもちろんそうだけれども、じゃあ結局自主的がいいよねと言ってるから、誰もそれに反論できなくて、部活動は過熱します。

過労死もそうですよね。中には自分は好きでやってるんだからいいでしょという、これは究極の言い訳なんですよ。

だから今それに対して、そういう人が1人いると、残業って伝染するんだよねって言って、ほかの人が帰れなくなるという。だから自主的だからいいというわけじゃないよねという論理が今、過労死の世界でもでき上がっているわけですよ。

そういうふう言葉が持ってきた負の側面というのが、尾見先生なんか本の中で提唱していらっしゃいますけれども、管理とか規制が悪いのかといたら、いや、そうじゃないでしょ。管理や規制によって、まずもって人々、子どもや先生の安全、安心が守られるんだという、そういう側面も考えなきゃいけないかなと。

2日前のことですけど、企業のマネジメントに明るい方が、「管理」ってあんまり使いたくないとおっしゃっていました。「マネジメント」と言うようにしている、と。なるほど、急にマネジメントと言うと、何か私たちのことを守ってくれるみたいな、そんなことをおっしゃっていて、同じことなんですけどね、管理もマネジメントも。

むしろ教育学の枠組み自体が、管理は悪で、自主的が対義語のような、自主的というものをむしろいいものだというふうにだけ捉えてきたと。でもそれはきっと相対立するものではなくて、まさに管理があるから自主性も育つんだというような、そういった発想の下で部活を設計していったほうがいいのか。安全、安心をベースにした上で、さあどうぞ、好きに部活を

やってくださいみたいな、そういう設計が必要なのかなというふうに思いました。以上です、ありがとうございます。

(大塚) ありがとうございます。それでは、尾見先生、お願いいたします。

(尾見) 私からは、暫定的に2つの観点で可能性を考えているということを申し上げたいと思います。1つはグローバル化です。大したことないとはいえ、日本でも外国人が少しずつ増えています。彼らが声を出してくれることによって変わるという他力本願作戦です。明治維新のきっかけなどと同じですけれども、結局外圧には弱いのではないかという話です。

私が英語の本や論文などで、部活を BUKATSU と表記しているのも、そういうことを狙ったつもりです。

もう1つは、桜宮高校のあの事件で、完全にフィジカルな体罰は確実に減ったと思うんです。残っていますが、それでもかなり減ったと思うわけです。

文科省もかなり熱心に取り組んだように思いますし、マスコミもです。事件発覚当時は、大阪市長は橋下さんが市長で、大阪市立の学校での事件だったのもあり、彼は取材にすぐ対応しなければならない立場でした。彼は、当初、体罰はある程度しかたがないと言っていたんです。自分が大阪府の北野高校でラグビーやっていて、殴られて育った世代などと言いながら。「先生が殴れなかったら、ろくでもないこととしてきて、むしろ先生の命が危険だ」といったことを言っていたのです。つまり橋下さんは、体罰は容認と受け取れるようなことを普通にテレビに向かって言っていたんです。

ところが、ある時から、遺族の家に行ってからだったかと思いますが、そうした転機があって、橋下さんの態度が変わり、そのあと、3月の桜宮高校のスポーツ科の入試をやめるというところまで動いて、やはり体罰はいけないと言うようになったわけです。

橋下さんの態度を評価したいとかそういう問題ではなく、体罰に対するバッシングが起こることで、発言や政策が結果として変わった部分もあるということが言いたいんです。そして、顧問は執行猶予付きの有罪判決を受けたという事実もあるので、さすがに体罰を内心は支持していた先生たちも脅威に感じたのではないかなと思うんです。それこそ自主的には先生たちが指導法を変えない、という話に通じてしまうのですが、でも結局そういう外からの圧力で大きく変わるというのではないかと。身も蓋もない話かもしれませんが、以上2つのことを思いました。

(大塚) ありがとうございます。金子先生、お二人の

ご回答から、何か追加コメントはありますか。

(金子) ありがとうございます。本当になかなかこれ、そう簡単にいくというふうには思っていない質問なのに、お二方ともずいぶん答えていただきました、ありがとうございます。

(大塚) それでは、フロアの皆さま方から、何かご質問、ご意見などありましたら、お手を挙げていただければと思います。

(フロア A) 質問は、中体連、高体連なんですけども、僕、一番そこを解体するのが、制度的に早いのかなど思ったりもするんですけれども、その辺、お二方はどうお考えなのでしょうか。

(内田) いきなり本丸に斬り込まれた感があります。現実的にはそういう答えは、十分にありうると思います。それで、ただ僕は、もともとは子どもの学校事故のことをやっていて、今、働き方も実はやっているんですけれども、なぜ教員のことを考えるようになったかと言うと、ここだけの話にしておきますけれども、学校事故のことを言い続けると、本当に嫌われるんですよ、学校から。もうあいつは学校の敵だと言われるんですよ。

これじゃあ自分がどんなに事故情報を出しても、もう届かないなと思って、むしろ耳塞がれるなと思って、もうこれは僕は先生の味方だよというメッセージを出すにはどうしたらいいかというので、実は部活動や働き方にも言及するようになったんです。

当然先生の中にも苦しんでいる人は山ほどいますので、それは僕はこのことをやってよかったなというふうに思っているんですけど、そういうふうに先生の味方につくと初めて、生徒の事故のことも含めて話を聞いてくれるという。

だから講演会では、実は働き方のテーマで招かれた時に、必ず学校事故のことを話してるんです、ついでに。そういうふうな、懐に入る戦略を立てることは大切だと思っています。

ところで高体連って、1年に1回、全国の研究集会というのがあって、もう全国の幹部が集まるとってもフォーマルな集会で、スポーツ庁の来賓も来るという。

今年の1月のことですが、その全国集会のオープニングセレモニーの後で、僕が講演するというところでもない事件が起きました。今日とほぼ同じこととお話したんですけれども、そうしたらもう終わった後に、会長と専務が来てくれて、「本当に良かったよ」って、とっても喜んでくださって。その後も、30分も歓談し

ました。だから私たちはつい相手を「敵だ」と思ってしまっただけで、意外と穏やかに話をしていけば、みんなこんなにわかり合えるんだと思って、僕自身が本当に驚いてしまったというか。

だから、そんなふうに、どこか遠い癌のような形で捉えるんじゃなくて、実は結構いろんなところで問題意識が漂流しているし、とりわけやっぱり子どもの命に関わるような話を、うまいこと過熱とリンクさせながら組んでいけば、確かに何か今おかしいよねというふうな、お互いが納得はできるのかなと思いますので、やっぱりそういうふうに本丸のように見えるところにも少しずつ分け入っていく、そういった知恵をみんなと共有していくということが必要なというふうに思っております。

(尾見) 私は内田先生のように本丸に入り込むようなことをやっていませんが、やはり中体連、高体連というのがいろいろなものを動かしている総本山だとは思っています。そして、高野連ですね。やはり野球というのは日本の「スポーツ」の牽引をしてきたことは確かで、たとえば山梨では野球の応援は全生徒で行くということがありますし。地元の予選で、公立校でさえです。同じようなことは、ほかの競技もまったくないわけではないでしょうけれども、野球に限って、新聞の地方版にはベンチ入りメンバー全員名前が出るし、キャプテンの言葉が載ったり、もっと言えば、軟式野球ですらマイナー競技に比べ細かい記事が出たりするわけです。

私が高校の時の同級生は、インターハイでヨットで全国優勝しているのですが、地方版の記事で一行だけでした。全国優勝ですよ、超マイナーとはいえ。そのくらいすごい格差がある中で、野球は図抜けていて、夏の大会だけじゃなくて、春の大会まで全国大会は全試合が、しかも試合時間が伸びても試合終了まで教育テレビで延長します、といった優遇ぶりです。いまやプロ野球だって延長しなくなっているにもかかわらずです。

そして夏の大会は、夏の風物詩みたいになっていて、お盆と言えば、実家で高校野球を見る、別に野球が好きではないけど、その時だけは見るといったこともあるので、個人的には本丸中の本丸は高野連ではないかと思っています。もちろん高体連、中体連が実際に変化しない限り、制度的なものを動かすのは難しいと思います。ただ、いずれにせよ、内田先生もおっしゃったように、実際には中体連、高体連といっても、そこをぐいぐい引っ張っているのはごく一部の人で、順番

で中体連の仕事が回ってきてたいへん、というような話は、私でも直接的、間接的に聞いたりすることがあります。ですから、これだけ世の中が変わりつつあるなかで、内部でも少しずつ変化してきていると思うので、内田先生みたいな方が上手に戦略的に立ち回ってくださることで、少しずつ、少しずつ変わっていくのではないかと。

一気になくすといっても、ではその後どうするのか、という問題はありますから。血を見るような話になると思うので、なかなか一気に変えることは難しいのではないかと思うということです。ただ、少なくともできるだけ子どもの命とか健康の犠牲が少なくなる努力だけは、私なりにやっていきたいとは思っています。(大塚) はい、よろしいでしょうか。それではそのほかにいかがでしょうか。

(フロア B) 本日はご発表ありがとうございます。大変興味深く拝聴させていただきました。僕はずっと中学校、高校、部活なんかなくしてしまえと言っている人間なんです。今日のハラスメントの文脈で話を聞いていると、どうしても児童、生徒が被害者で、先生が、あるいは指導者が加害者というような、何となく関係性に見えてしまう。

児童、生徒からすると、素人の先生方に体罰なんかも加えられる恐れもある中、あるいは命の危険もある中で受けている、だから被害者だろうということはわかりやすい。

ところが先生からしても、やらされている先生方もたくさんいると。それによって、プライバシーは削られていて、家庭で子どもと過ごす時間も削られる、あるいは授業準備さえもろくにできない、というような状況も行われているのであれば、それも被害者。

保護者のほうに目を向けてみると、保護者もやっぱりそこで子どものために何かやってあげないと、あるいは今度は夏に大会なんかや練習が入ってくると、子どもとレジャーにも行けないなんていうことを考えると、結局みんな被害者になっていると。

じゃあこんなに被害者だらけの部活が、なぜこんなに存続しているかということ、もう一段上のレベル、つまり日本国民全体が実は加害者なのではないかと。先ほど尾見先生がおっしゃられた大船渡の佐々木君が投げないという判断をした。普通プロ野球であれば、ピッチャーが1回投げれば、中4日、中5日空けるのは当たり前。でも甲子園では、毎日のように、毎日毎日投げないと、というところが出てくるわけですね。あれを見て、日本国民は感動するわけですね。

部活動をなくせばいいと思っても、甲子園がなくなったらどうするの。夏の風物詩なくなるじゃん。正月に箱根で大学生が山登らなかつたらどうするの。盛り上がらないじゃん。何となく日本人全体がああいう若い子たちが一生懸命頑張っているのを見て、何かみんなで感動しようよというような風潮が残っていて、それがなかなか部活を変えられない、やめられない、とめられない、どっかの歌手みたいですけど。何かそういうような雰囲気を作り出しているような感じがします。

尾見先生の本のタイトルの中にも、部活というものは文化だと、日本の文化ということ考えた時に、この日本人が全体的に持っている精神構造を変えていかないと、部活をなくしていく、あるいは少なくとも部活のやり方や構造を変えていくというのはなかなか難しいのではないかなと思うんですけども、もしそのあたりでお考えとか、ご意見があったら、お聞かせいただければと思います。よろしくをお願いします。

(尾見) ご質問ありがとうございます。そのとおりだと思いますし、僕は、内田先生もご発表の中で触れておられたと思いますが、要するに、甲子園とか、箱根とか、いわばトップレベルの競技というのを、部活がなくなることによって消滅させることになってしまうのであれば、それは反発も大きいだろうし、私自身もそうすべきではないと思っています。

だからうまく棲み分けができるように、少しずつ上手にその構造をいじっていく必要があるのではないかなと思いますし、本の中でも一応それっぽいことは書いたつもりです。

日本人の美学と言えいいでしょうか、日本人だけの問題かどうかはわかりませんが、いずれにしても、甲子園や箱根を見て感動するわけですよね、実際に。少なくとも私は感動します。

だから「最後まで肘が潰れても」とか「この後プロのことなんか考えてはいません」と本人が言ったり、今日この舞台がすべてだというような価値づけを本人がする姿を見て、素敵と思ってしまったり、「まだいけるのにどうして交代させるんだ」とテレビに向かって言ってしまった、というのは、そういうのに慣らされてしまっているからですよね、私たちがね。

だからそれも否定はできないし、私自身もそういう部分もあるので、そういうのは残しつつ、うまくこの構図を変えていくしかないのではないかなと思っています。他方で生涯スポーツとして、楽しむようなものとして、中学や高校でスポーツを楽しむようなものとし

て、ただ楽しむだけではなくて、それなりに対外試合とかもやりながら、でも体の健康を優先にして、ほかの競技もやったり、ほかの趣味もやることのできるような仕組みというのを何とかして作っていく必要があるのではないかと思います。そんな感じでいいでしょうかね。

(フロア B) すみません、ありがとうございます。結局、例えばヨーロッパのサッカーなんかで言えば、いわゆる遊びというか、同好会的なサッカーは、高校とか、それから中学校とかであったとしても、トップの選手たちはもう早々にクラブチームに入るわけですね。クラブチームに入って、クラブチームは結局それが将来の自分たちの、プロ契約をして、戦力になっていくというのを考えていくので、当然心身面含めて、悪影響のないような育成をしていくわけですね。

日本の場合には、結局高校がそれを担っていて、それが野球だったら、プロ野球になっていくというところで、学校がプロとの接続をしているというところで、どうしてもああやって甲子園みたいところで過熱が出てくる。

なので、基本的に、僕は、本気でやる子たちは、全部そうやってクラブチームとか、民間に任せるべきであって、学校は本当に同好会、愛好会が勝手にわちゃわちゃやって、たまに練習試合とかやってるぐらいがいいんだろうと。何かそのくらいの明確な棲み分けをしていかないと、なかなか今の過熱ぶりというのは止まらないんじゃないかなと思っています。すみません、ありがとうございます。

(大塚) はい、ありがとうございます。ほかに何かありますか。

(フロア C) 私、この雰囲気の中で、ちょっと言いづらいんですけど、16年間中学校の教員をしておりまして、とてもいたたまれない気持ちでこの時間を過ごしていたんですけども、私自身も16年間、おっしゃるように、もう土日休みもなく、休みと言え、台風が接近してきた時とか、あとゴールデンウィークもすべて遠征に行くだとかというような日々でしたので、すごく切実に、今現在入会してないんですけども、考えているところで、今日参加しております。

すごく部活動について考える意味で、経験も踏まえてなんですけれども、すごく地域性という要因が絡んでいるなというふうに経験がございまして、例えば20年前に勤務していた学校では、部活の数を減らそうというふうに職員会議で話をしていました。

ただしかながら、小学校のジュニアの時からある

部活、地域的にやっていると、この部活は減らせないだろうとか、やはり保護者の思いもあるだろうということで、結局部活の数を減らせずに、20年前から学校現場でもそういう議論がまずなされているということ。

そしてある地域では、荒れた学校を部活と掃除で立て直したという、そういう事例があることから、学校文化の中で、1つの神話みたいになっているところもあるのかなと。

また実際子どもたちのほうを見ると、1割ぐらいの子どもたちがやはり部活に対してとてもネガティブな思いもあったり、苦悩している子もいるんですけども、多くの子たちが、僕は部活があるから学校に来るという子たちも実際にいるのも事実かなと。

または中学3年生の中体連が終わって、部活を引退した後で、問題行動が起きてしまうというようなこともあって、どうしても部活というのがパンドラの箱を開けるように、いろいろなものと連動していて、どこか学校の裁量に任されているところもあるので、学校で部活を減らそうとしても、ある地域が部活をやって、大会とかになると、やっぱり勝ちたいというのもあるって、何かいろいろなものが連動している、とても複雑な議題というか、議論になるんじゃないかなというふうに思っています。

ちょっと思いが溢れて、ちょっとうまくまとまらないんですが、内田先生の資料の中に、リスクへのアクションというところがございまして、持続可能モデルというので、先ほどリスクを減らしていくというような話がありました。

どうしても実践者寄りの話になって申し訳ないですけれども、リスクを減らそうとしても、例えば先ほど室内で廊下を走っているのは、本当に心痛いんですけど、私も経験者でございまして、雨の日になると、あのような光景がおそらく多くあるのかなと。雨の日でも、体が鈍らないように、体を動かさないといけないということもあって、階段を上り下りしたりとか。でも多くの教員が、おそらく子どもだけでは活動させないという価値観の下、やっていると思うので、しかしながら、それでもけがが起きてしまうと。

リスクを減らそうと思って手立てを踏んでも、また別のリスクが起きてしまうと。すごく私の中で衝撃だったのが、やはり去年の愛知県の小学生が生活科の学習の中で熱中症で亡くなっているという事案があって、その事案を見た時に、おそらく多くの教員が熱中症対策をしていると思うんですけども、それでも起きてしまう死亡事故というので、リスクって、ゼロに

できるのかなと。もう究極、人を増やすしかないのかなというところもあって、堂々巡りしているんですけど、リスクを減らすという1つの目標を掲げたとして、実際具体的にどのような手立てがあるのかなと、人を増やすということ以外でというか。何かご助言をいただけたらと思いますので。

(大塚) はい、とってもリアルで大事な質問だと思います。

(内田) 現場からのご報告、ありがとうございます。おっしゃるとおり、本当にすべて納得いたします。それでやっぱりリスク研究者って、まずゼロリスクは想定してないですね。世の中、すべてが危険だからです。ただすべてが危険な時に、それを守るための有限の資源をどうやって振り分けるかという設定をしています。

実際に部活動って、たくさんの犠牲の上に成り立っている、そしてそれが今大学の先生ですと、当然お感じだと思いますけれども、全国大会に行ったような子どもたちが、大学で部活に入らないんですね。非常に残念です。そこまで驚異の成果として力を身に付けたものが、大学で途切れるというのはまったくサステナビリティはないわけですね。そういう事例に会うたびに、僕はもう非常に残念な気持ちになります。

ところが学校は3年間盛り上がり、よかった、今も毎年夏休みに会ってるんですよって言うけど、その涙というのは、そこで途絶えているんですね、3年間で。あるいは、何かの犠牲の上に成り立っているわけですね、何人かが離脱していくという。あるいは大学に入って離脱していくという犠牲の上に成り立っている。

そうじゃなくて、みんながハッピーに部活っていいよね、できれば今も続けてますよという、その未来を僕は目指している。そのためにやっぱり今、あまりにもリスクが巨大で、部活というのは決してゼロか100の話ではなくて、どうやってサステナビリティを高められるか、高いリスクをゼロではなくて、少し減らして、みんながハッピーになるにはどうしたらいいかという設計を考える。

例えば一体感が生まれる、3年間の活動を終えてみんなが涙する。そのために本当に週6日も活動が必要ですか。週3日で、効率的に、1日2時間の中で濃密な活動をして、それが得られませんかという問いを、もうとにかくゼロベースで作っていくということだと思いませんか。

部活の意義はもう本当にたくさんあるわけですよ。

その意義を残しながら、犠牲を減らしていくための制度設計を今やらなきゃいけないのかなというふうに思っています。

もう1つ、だからそれって結局働き方改革にもつながるんですけれども、部活の意義とか、いろんな学校行事の意義とか言ってる絶対減らなくて、意義にやっぱり優先順位をつけて、意義があっても削っていくという。それはさっきのリスクの話と同じで、「教員は有限で、教育は無限」なんですよね。

その時には、やっぱり今までは無限の教育に教員を合わせていて、毎年学校で3~4人倒れていく、でも子どものためというキラキラワードがあったわけなんですけれども、そうでなくて、有限の教員に教育内容を合わせていって、そして元気な先生を作り出していく。そしてそれがもしかして授業の中だけで勝負できるような、部活が週2日、3日だけでも子どもを引きつけられるような授業を作っていくみたいな、そういった設計も考えていくことがいいのかなと。

だから今はやっぱり意義を語っても、もうどうしようもなく、意義はあるんだけど、それが膨れ上がった。じゃあ意義を残しながら、どうやってみんなをサステナブルにしていくかということかなというふうに考えています。

(尾見) リスクを減らすことに関して1つ言いたいことがあります。それは、部活をやめることを認めることです。子どもがやめたい時に「やめていいよ」と先生が言ってあげられることがものすごく大事だというふうに、私はかなり切実に思っています。

『日本の部活』のなかで一途主義という章がありますが、最後までやり遂げることがいいということが、極端に言われ過ぎていて、「やっぱりほかのことをやりたい」とか「野球は俺ちょっと無理だ」とか率直な思いに対して「おまえら、ちゃんぽらんじゃないか」と言ってやめさせないですよ、普通は。もちろんちゃんぽらんな生徒もいるとは思いますが、それもひっくるめて、退部というのをマイナスなものにしないということが大事だと思います。

中学校や高校では帰宅部という「部」が本当にまことしやかにあるような感じで言われますよね。「部」があるのが当たり前なんです。やめてもやめられない。やめても帰宅部、みたいな感じなわけです。このようにあまりに部活が前提にあるということを押付けられて、苦しんでいる子どもたちがいることは間違いないんです。直前の日本心理学会で、小児科の先生と共同研究の発表をしたんですけれども、対象となった子

は「やっぱりやめるなんてとても言えなかった」と言うんです。そして、本当に追い詰められて、学校に行けなくなって、ある種の障害であるという診断まで受けることになるんです。その後、幸運にもいろいろな出会いがあって、なんとか高校の途中から元に戻れたんですけれども。他にも似たような自殺まで追い込まれる事例もあって、そこでは、一度やめようと思って周りに相談したら、上級生も先生もやめないほうがいいって、全員が言ったらしいんです。もちろんそこに悪意なんてみじんもありません。

部活をやっていれば内申点として加点されるとか、あるいは加点があるかどうかはわからないけど、やっておいたほうが無難だと言われたり、「ここまで続けてきたことをここでやめちゃうのか、おまえは」と熱く語られたり。「辛くてもここで乗り越えられれば、おまえは一皮むける」とか「成長できる」といったことを無責任に言い過ぎだと私は思います。

やめることができるだけで、リスクもかなり減らせるのではないかなというふうに私は思っています。

(大塚) はい、ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。はい。

(フロアD) 中学校で教員している元同僚から、夏休みとか、土日も含めて、保護者から、何で休みなんです、もうこの日も部活やってくれないと困るんですという声を聞きました。今、週3日とかというふうに新たな形でできた場合、ほかの平日の放課後であったり、長期の夏休みであったり、部活以外の、今まで部活で過ごしてきた活動時間を何で過ごせばいいのか、親も生徒も納得できる制度設計というのが、先生方で何かお持ちだったら、教えていただきたいと思います。

学習塾が、僕自身、ご家庭の予算でできるのだったらそういう道もあるでしょうけども、金銭的に厳しい場合ですと、放課後の過ごし方が難しくなってくると思うので、どこかの自治体で何かやってる例とかあったらお聞きしたいなと思います。

(大塚) はい、ありがとうございます。こちらを立てれば、あちらを立てられずという、本当に難しい課題かと思いますが、先生方何かアイデアがありますでしょうか。

(内田) ありがとうございます。いま、運動会を午前中だけにしたとか、家庭訪問をやめたとか、通知表の所見欄をなくしたとか、遠足なしというのもこの前ニュースでありました。

そうした従来の当たり前をぶっ壊すような事例、成功事例を今集めていくしかないのかなと。もう部活を

週6日以上やるのが当たり前になり過ぎていて、今ほかのオルタナティブが見えない状況だと思うんですよね。でも実際に、現実には、今だって、いや、かつてだって、週3日で部活楽しんで、卒業していった子は山ほどいるわけです、サンプルは。だから別にそういう話をみんな集めていけば、ああいいんだな、じゃあそれ以外何してたの、家で寝てた、ああ寝れるのかというふうに考えればいだけかなというふうに思います。

逆にやっぱりむしろ抱え込み過ぎていたのと、学校がですね、部活だけじゃないですけれども、教育万能主義という形で言われますけれども、いろいろなものを抱え過ぎてきた。なぜ、放課後にコンビニでたむろしてたら、それを部活で抱えこまなきゃいけないのかって。それは保護者、地域の仕事じゃないのって。それを一生懸命先生たちが部活、いやよくそんなコンビニで遊ぶぐらいだったら、家でテレビゲームするぐらいだったら、先生が囲い込みましようと言って、囲い込んで、そこでビンタしてるんですよね。何それっていう、誰が得かよくわからない仕組みなんですよ。

成功事例は、実はたくさんあるんだけど、それを見える化して、そういう現実があり得るんだということを出していくというのがこれからの大きな課題かなというふうに考えております。

(尾見) 保護者がむしろ部活をもっとやってほしい、せっかく夏休み、せっかくの週末に預かってくれないのは困る、といった話ですよ。

実際にアメリカの私が住んだあたりだと、夏休み2カ月半もあって、部活みたいのはないので、その2カ月半をどうやり過ごすかというのは、毎年向こうの家庭の課題になっているという話を聞きました。実際に部活のようなものがないと、親御さんはたぶん大変になるんでしょうね。

ただでさえ、先ほどの働き方改革の話ではありませんが、日本の会社はいっぱい働かされることがあるので、働き方改革が「なんちゃって」で終わらなければ、定時で帰るとか、定時前だって在宅でもできるだとか、そういうふうに大きく変わってくれればと思うんですよね。逆にそういう環境ができない限り、「週末の子どもをどうしてくれるのよ」「学童保育にいくらかかると思ってるのよ」という声に対してなかなか説得できないかもしれないとは思っています。

少し前の話に関連しますが、たとえば、部活ではなく地域のクラブチームがたくさんあればいいんですが、クラブチームをいっぱい作るためには、コーチが必要

ですよ。そのコーチの人材って、もちろん研修は必要だとしても、やはり会社で残業している子持ちの父親や母親のなかの、自分の時間を作ってでもやりたいという人がそれだけの時間を取れるかどうかということがすごく重要だと思うんです。アメリカで息子や娘がお世話になったコーチなんかは、4時になったら、「ちょっとコーチがこれからあるから」と言って、早めに出ていくという話を聞いたことがあります。向こうはスポーツのコーチがリスペクトされているというのもあって、アマチュアの小学生相手のバスケットボールのコーチにまでそういう環境があります。ですから、部活の代替としてのクラブチームといった理想的な案があるにしても、それを支えるための外部環境が整っていないと、うまくは進まないのではないかと、今の質問をうかがって思いました。

(大塚) はい、ありがとうございます。進行役としましては、ハラスメント防止委員会企画のディスカッションは、質問が出ないのが怖いことが多かったんですけれども、今日はその心配もまったくなく、あっという間に時間が来てしまいました。まだまだ発言されたいことはみなさん多々お持ちかと思いますが、最後に先生方からひと言ずついただければと思います。

(内田) 今日は教育心理学という点では、僕はアウトサイダーなんですけれども、「立場は違えど、気がかりなことは同じ」ということを強く実感しました。その同じ課題に、各学会がそれぞれの観点からアプローチして、お互いに手をつないでいくと、きっと素敵な未来が待っているのではないかと気がします。

今日はむしろ、ほとんど教育学会にいるんじゃないのかというような議論やご質問が多かったですよね。こうやって心理学でも教育制度のことをしっかり考えてくださって、すごくありがたいなというふうに思いました。本当にどうもありがとうございます。

(金子) すみません、最後にちょっと、今、内田先生のお話を聞きながら思い出したんですけれども、実は私、先週千葉の消防署に詰めてまして、別に消防の仕事をしに行っただけじゃなくて、たまたま研修予定になってました。そこで消防の、実はその研修の話を今、思いついて、したいんですけど、なかなかこの体罰の規制が難しいということを、実は消防で議論してきたんです。何を議論してきたかということ、罰としてやらせる腕立て伏せは果たして何回までいいかということですよ。

というのは、裁判で1万回というのがあるんですよ。1万回で、八千何回やって、死にそうになったという、

それで裁判になったケースがあるんですね。

そうすると、今の常識はどれぐらいなんだろうというのが非常に私、関心があって、あちこちの消防署に行くと聞くんですよ。どれぐらいでしょうねということ、私は自分の感覚で言うと、せいぜい100回ぐらいかな、100回、50回ぐらいかなと、自分の体力考えて思ったんですけども、大体200回は最低みたいな感じですね。500回まではいいでしょうという。

そうすると、えっ？っていう、それはもちろん消防署によってもずいぶん違うんですけど、それってもう教育とか訓練じゃなくて、もうまさしく体罰ですよ。だけど彼らの感覚で言うと、体で覚える、体で覚えるんですね。それで失敗したことが、その1,000回と結び付いて、もうやらないということで、体で覚えてもらう。しかもそれがかなりの人がみんな支持しているという。あんまり抵抗ない世界なんですよ。

それで提案したんですけれども、とりあえずじゃあ200回にしよう。徐々に減らしていくしかないんですね。とにかくこの消防署では200回にしようとか、50回にしよう目標を作ってやっていこうみたいな話を、小学校みたいな話をしてきたんです。今の内田先生のお話を聞きながら思い出したんですが、やっぱりかなり許容されているところをだんだんだんだん修正しながら、当たり前を作っていく、しかもそれが世の中の当たり前とつながらないとダメですね。皆さんそれ、いつまでたってもそんな感覚ではとんでもないことになりますよみたいな脅かしをしながらやってきたんです。やっぱり教育現場、部活の現場はちょっと異様な状態になっていると思うので、それを世の中にどういうふうに合わせていくか、本当にそのことを考えなくちゃいけない時期かなというふうに思いました。(大塚) はい、ありがとうございます。ハラスメント防止委員会として、昨日もお昼に会合を持ちましたが、1つの課題として、ハラスメント加害者になる側が、無意識、無自覚でハラスメントに相当することを

やってしまうということが改めて取り上げられました。

なぜそういうことが起こるかという、今日の話でもそれが典型的に出てきていたと思いますが、文化的な背景、慣習といったものがある中で、ハラスメントになっていることが見えなくなっているということがあるのかと思いました。

それをどう打ち破っていったらいいのか、それは制度を変えていくというようなことも含めて、いろいろなアプローチの仕方があるんだろうと思いますけれども、私自身、大学入試などを担当してきました経験からしますと、1つの試みをするともた別の問題が種々出てくることがあります。高校において、部活動を例えば週3日に絞ることができたとしたら、あと2日は英会話も「技能」ですから、その入試のための準備の場が放課後に代わって入ってくるのではないかとふっと心配がよぎったりもしたのですが、いずれにしても、1つの試みで簡単に片付けられないような問題が背後にいろいろ出て参ります。少なくとも、そのことに気配りすべきことを知る機会に、このハラスメント防止委員会の企画が一助を果たせばということを感じた次第です。

最後に、私は2013年から、本企画に7回携わってきましたが、今回をもちまして、ハラスメント防止委員会委員長は、放送大学の進藤聡彦先生が引き継いで下さることになりましたことをご紹介します。最初にも述べましたが、本シンポジウムも、実質的にコーディネートしてくださいましたのは進藤先生であります。みなさまには、引き続きよろしく応援していただき、また来年の大会のハラスメント防止委員会企画の催しにも是非ご参加いただければと思います。

最後に、今日ご登壇いただきました、内田良先生、尾見康博先生、そして金子雅臣先生に拍手をもって御礼をしたいと思います。どうもありがとうございました。